

# 本が死ぬところの暴力が生まれる

バリー・サンダース著

杉本 卓訳

日本の教育が基盤から揺らいでいる。たとえば学級崩壊。子どもたちが突然切れ、荒れ出す。中学校でではない。小学校、それも低学年での話だ。なぜこんな事態が生じているのか。どうしたらいいのか。

アメリカ教育の現状を背景とする本書は、この問題に一つの見方を提供する。アメリカでは学校から大量のドロップアウトが生じている。彼らは街に出てギャング集団をつくり、犯罪に手を染める。大量の青少年が社会的に疎外されていく。この原因を、著者はまず識字、文字を読み書きする能力が失われていることに求める。

文字の読み書きは人に自分のあり方を見つめ直すことを要求する。読み書きの長い歴史が人の「自己」を作り出した。読み書きの能力が失われることで人から「自己」が失われ、そこにむきだしの暴力が噴き出す。

これだけなら教育熱心な親たちと学校制度によって小さなときから大量の文字を浴び

せかけられている日本の子どもたちには無縁な話だ。だが著者の眼目はその先にある。

文字は話し言葉の世界に支えられてはじめて実感あるものとなる。母親が幼児に語りかける一見無意味な、しかし愛情のこもった言葉。遊ぶ中で子ども同士が身体をぶつけ合いながら交わす言葉。そんな話し言葉の世界が失われてしまつたことが子どもから識字能力、そして自分が奪われていく根本的な理由だ。

となると話はまさに日本にこそ当てはまるではないか。教育「熱心」な私たちは、いまや小学校にパソコンを導入し、インターネットで知識を大量に与えることで、いろいろな教育問題を解決できるという信仰にすがるとこうまでに至っている。だがそんなことはむしろ逆効果なのではないか。大切なのは響きあう声を仲立ちとする生身の人間同志のかわりの復興だ。

著者の主張は日本の教育現状に真正面からぶつかってくる。ではどうしたら声が響きあえるようになるのか、具体的な答えは著者も提示できないでいるのだけれども。

II 宮崎清孝・早稲田大助教

